

エペソ人への手紙 2 : 4 (パウロ)

Preface

今朝は、「しかしの愛」ということについて考えていきたいと思います。

「しかし」という接続詞は、前の文章の内容とは反対のことを言う時に用いる接続詞です。

例えば、「めぐみ教会の牧師洪豊和はイケてない。しかし、よく見るともつとイケてない」という使い方は、接続詞「しかし」の正しい使い方ではありません。

「しかし」の後には、その前の文章の内容をひっくり返すような内容が続かなければなりません。

聖書は、どうすることも出来ない既存の内容をひっくり返すことに満ちています。

「しかし」という逆転劇が、聖書が私たちに伝えたい要点とも言えます。

先週まで、エペソ書 2 : 1 - 3 から、私たちは「自分の背きと罪の中に死んでおり、この世の流れを作り出している空中の権威を持つ支配者サタンや悪霊どもに従って、自分の肉の欲と心の欲望を行うことに生きていた不従順の子ら、御怒りを受けるべき子らだった」という事を見て参りましたが、

今日の聖書箇所エペソ 2 : 4 は、「しかし」という単語とともに、不従順の子ら、御怒りを受けるべき子らということを根底からひっくり返すような福音について話し始めます。

「しかし、あわれみ豊かな神は」という言葉をもって、キリスト教信仰固有の特別なメッセージを紹介します。

「しかし」以下に続く内容は、全くもって神様がしてくださったことであり、これを聖書は福音だと、良い知らせだと言います。

この福音の内容に関して、人間を含めたどんな被造物も関与することも出来なければ、想像することも出来なかったものでありますから、私たちの中から生まれる由もなく、ただただ神様の全面的なご介入ゆえの賜物、愛、恵みでしかないことをパウロは嬉しそうに、この上ない喜びとして語っていきます。

その思いが、「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに」という言葉に込められています。

神様に全面的に寄り頼んでいる福音ですが、いつの時代、どの世界にあっても変わらず同じように受けてきたチャレンジがあります。

それは、私たちの日々の生活からかけ離れていて、私たちの抱える問題に対して具体的に答えてくれないという非難です。

今ある私たちのこの日々の暮らし、全世界が置かれている状況に、福音は何の関りもなく、接点を持っていないというわけです。

戦争が止み、病気が治り、景気が良くなり、差別も区別もない世界をこの地に望んだ時、聖書の語る福音が直接的な助けや道具になっていないかのように感じると言うのです。

事実、旧約聖書に出てくるイスラエルの民たちは、夢のカナンの地に入ったは良いものの、井戸を掘り、畑を耕し、街を作り、教育を施し、議会を建て上げ、都市を作り上げていく中で発生するありとあらゆる問題において、神の言葉が、福音が具体的な助け、即効性のご利益が無いかのように感じ、結果的に偶像崇拜という欲望に走ったすえ、道に迷い、滅びていきました。

しかしながら、今日この場で、また毎週の礼拝を通して皆さんにお伝えしたいことは、聖書の語る福音でなければ、現代のこの社会状況や世界情勢や私たちの日々の暮らしをまことに正しく把握し、解決へと導くものはないということです。

聖書が語る教えを理解し、信じ、適用させる以外に、私たちの置かれている状況や現代の情勢の真相を究明し、突破するものはございません。

聖書の語る福音は、私たち人間の人生暮らしの全体・全領域について取り扱っています。

なので、その福音が、私たちが身を置くところや状況で何を語り、どんな関係性を持っているのかを知ることが重要になります。

平たく言いますと、何もって、何を通して世界を見、期待し期待しないのかが、私たちの生き方を決定づけるということです。

私たち生まれながらの人間が、不安に陥る根本的な理由は、揺るぐことのない土台、ものさし、秤を持っていないためです。

私たち生まれながらの人間の生き方は、いつも私たちの目の前に繰り広げられている状況が先で、しかもその状況を的確に判断する変わることのない土台を持たないために、土台を装ったところろ変わる意見や見解や流れに操られながら障害物だらけのところを何も見えずにいつ転ぶか心配しながら、不安に駆られながら、恐れに怯えながら前に進んでいるのか、後退しているのか分からないかのように歩を進めています。

それらの心配や不安や恐れを取り除く仕事は、政治家や国や経済を動かしている人たちの役割で、彼らがしっかりやれば状況が好転すると、いつの時代も期

待し続けてきましたが、状況が好転したためしがあったでしょうか？

そこに変わる事のない平安や土台のようなものがあったでしょうか？

もちろん、見た目が変わり、形が変わって好転したように見えることはありましたが、その内実は変わったためしがなく、いつも不安ですし恐れや怒りがあります。

なぜならば、物事すべて、その置かれた状況ばかりに目をやり、その状況の表面的な形を変えることばかりに気をとられているために、本質的な真相が見えていないからです。

物事を、目の前に起こっている状況のみから判断しようとしたところで、本質は何も見えてきません。

むしろ聖書は、何か物事を判断する時、その繰り広げられている状況や状態については一番最後に取り扱い、先ず先に決して動く事のない土台、事実、真理に目を向けさせます。

つまり、聖書の始めから終わりまでそのすべては、先ず何よりも、唯一まことの創造主なる神様の、イエス・キリストの真理を基に物事を照らし合わせていくことの重要性を説きます。

キリストの真理に、人生や人間や世界を照らして見ない限り、単純明快に物事理解することは出来ないと言います。

まずは神の語る真理に照らし合わせないことには、状況が一体どういう理屈でそうなっているのかを本質的に理解することが出来ないと、口酸っぱく聖書は語り続けます。

物事を人間的な水平関係だけに留めて置き、横のつながりだけで人間や世界を見ることを、聖書は中断させます。

何事もまことの神様の真理から、その見地から始めなければならないと言うんです。

置かれた状況に関しては、その次ですね。 まずは、神との関係です。

Part Two

現在私たちは、人によっては第三次世界大戦を危惧するような時代、国の法律を変えてまで戦争が出来る国にしたいという願いがまことしやかに進められている時代に生きていますが、それら全人類の問題の本質、どのような状態ゆえにそのような事になっているのかを知るためには、人間という存在が一体全体どんな存在なのかを解かない限り、問題に対して真正面から相対することは出来ません。

国際連合が設立されれば、世界を揺るがすような大きな戦争は起きないし、起こったとしても止めさせることが出来ると人類は自負してきましたが、どうですか？

世界から戦争が無くなったためしはありませんし、軍需産業の栄枯盛衰が日本を含めた多くの先進国と言われる国の景気に大きな影響を与えているという事実をあまり教えることもなければ、知ったところでその恩恵に与っている領域があまりにも多いがためにどうすることも出来ません。(私の好きな映画でアイアンマンという映画がありますが、そのことをよく表しています)

またたとえ私たち、武器なんていう生々しいものは取り扱わないと言いましても、その代わりに、経済戦争なる戦争に勝つために命を懸けて、生産や物流や供給のシェア争いに身を焦がしながら生活せざるを得ません。

そのひずみからでしょうか。世界の紛争で亡くなる人の数の5倍以上の人々が自らの命を絶っているのが、私たちが暮らしている平和を自称する日本という国です。

私たちの社会、戦わずにはやってられないという面で、ダビデやパウロや織田信長や大日本帝国時代と本質的に何ら変わることはないですね。

結局、形は違えど、どんな形であれ領土や所有権という争いをしなければ、この世界では生きられないんです。

私もよく分かりませんが、メタバースというコンピューターネットワーク上の仮想世界にあっても渋谷の街を模倣した土地や建物が、将来の仮想世界における領土争いや不動産獲得のためにもうすでに売買されています。

実世界ではない仮想世界の中でもです。

なぜそこまでして、争い、戦い、奪い、奪われ、占領し、占有しようとするのか、先週までのメッセージの中で確認して参りました。

パウロがエペソ書2：1－3で露骨に語っていますが、私たち自らが、本質的にどんな存在で、世の中が本質的にどのような状態なのか、神の真理に照らし合わせた人間と世界の本性を、心痛むけれども直視しなければ何もわからないですし、救いの必要性や恵みについても私たちは理解出来ません。

パウロは、イエス・キリストという真理に照らし合わせた人間の実体・実存を知らない限り、人類の問題を解くことは出来ないことを教えてくれます。

それなしで、人間の問題を解こうとすることは、結局のところ、本質的に無毛な戦いでしかなくなってしまいます。

私たちは何か事が起こると、国際会議や起こっている問題について多種多様な言葉を並べ立てるところから入って行こうとしますが、もっと奥入った人間の性質、本性、実体、どんな被造物なのかという質問を投げかけなければ問題の本質が見えて来ないですね。

もし、私たち人間がもう少しの教育や知識や情報があれば大丈夫な本質的に

善なる存在であるならば、問題を治療し直すことが比較的容易なことでしょう。

しかし、パウロが指摘する人間の本性が真理であるならば、どんな処方や方法ややり方も焼け石に水状態であり、根本的な解決とは程遠い、ただの時間の浪費になってしまいます。

これまで見てきましたように、罪の中に死んでいて、神の恵みの内にない生まれながらの人間は霊的に死んだ者であり、神との関係の中にもなく、サタンの強い指示のもと動かされ、支配され、思考も、行いも統制されてきました。

これが、神の真理に照らし合わせた生まれながらの人間の立ち位置です。

実にアダムから引き継いだものゆえに、その本性自体が墮落して、罪に汚染されたところから始まり、成れの果てに神の御怒りを受けるところへといます。

それゆえの今の状況であり、情勢であり、私たちの社会です。

罪な本能を抑えることが出来ずに、本当のところは戦いを愛しているのではないかと思ってしまうほどに、終わることのない戦争のある世界の理由がここにあります。

Part Three

ヤコブの手紙4：1-4 (パウロ)

なぜ私たちは戦争をし、領土や覇権争いをし、人間同士狂ったように殺し合うのか？

それは、神の敵となり、私たち自らの体の中から出てくる欲望が原因です。

私たちの抱える問題の根本的な原因は、私たちのからだにある戦う欲望です。

あの人や、あの学校や、あの企業や、あの政府や、あの国家の問題ではなく、私たち一人一人の問題であり、すべての組織団体家族の構成員である私たち一人一人の戦いたいと思う欲望が原因です。

約束を破るとか、人の悪口を陰でこそこそいうとか、妬みや恨みということの延長線上に国家同士の戦いがあります。

ともすると、国家同士の戦争を前にしますと、自分を良い者に祭り上げて語ろうとしますが、国家は何か掴みどころのない抽象的な何かではありません。

私たち自身の中に見つけることの出来ない善なる良いことを国家に求めること程、根拠のない求めで、現実逃避で、嘘つきなことはないでしょう。

自分自身の中にある善を他者に求めることこそ、底辺からてっぺんに至るまで、個々人から国に至るまで、またさらには、各大陸、全世界に至るまで貫いている原理です。

聖書は、大昔から今に至るまでの本質的に変わることはない世の中の状態に

ついて、ノアの洪水の時代やソドムとゴモラの時代と何ら変わる事のない滅びが決まっている世界であることを真つすぐに語ります。

ルカの福音書 17 : 26 - 30 (パワポ)

人とその世界は、食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり、売ったり買ったり、植えたり建てたり、心と肉体の望むままの欲望に支配されている状態です。

そして、その欲望ゆえに滅びを招いていることが決まってしまうと言います。

では、どうしましょう？

どうすることも出来ません。 私たちになす術はございません。

私たちから、これらのことを解決する福音は、残念ながら出て聞きません。

裸の大将で有名な山下清画伯という方がいらっしゃいましたが、私自身絵画についてはよく分かりませんが、なんだか山下清の絵はほっこりする優しさを感じるので好きなんです。(もちろん本物の絵は1枚も持っていませんが)

戦争を経験した山下清さんが生前こんなことを言っていたというのを先週の新聞の記事で見ました。

「みんなが爆弾なんか作らないで、きれいな花火ばかり作ったら、きっと戦争なんか起きなかったんだな。」

確信を突くすごい言葉だなと思いました。

でも残念ながら、爆弾を自由に作れるような富や権力を人間手に入れますと、花火ではなく爆弾を作ってしまうのが、生まれながらの人間、至って自然な人間です。

物事正しく変えたいと思っても、戦う欲望が邪魔をして、物事の本質を変えることが出来ません。

だから、ソロモンが「これを見よ、これは新しいと言ったところで、日の下に新しいものなんか何一つない」と言うわけです。

「私たち過去の教訓をもとに今を変えなければならない」よく言ったりしますが、過去についての責任をどんなに担おうとしても、変わらず今も罪の中に死に生きているのですから、そんな罪な人間の状態が根底から変わらない限り、将来の歴史も確実に変わることはありません。

私たち生まれながらの人間は、いつの時代も、自分たちの時代には物事を正しくすることが出来ると確信をもって自信あふれる楽観主義に生きますが、全く同じように過去の世代も、それよりも過去の時代に起こった悪いことを正し、より良いものを作り上げることが出来ると言いながら、もっと状況を悪化させて

終わってきました。

それでも認めませんし、過去よりも今に生きていることに優越感を覚え、過去よりも良い教育を受け、過去よりも文化的で、過去の人たちが知る由もなかったことについても知っており、当然過去よりも色々な面で進歩しており、必ずや成功できるし、成功を収めることが出来ると考えますが、正直言ってどうですか？

昔は、コンクリートジャングルに立ち上げた高層マンションのペントハウスに住むことを贅沢と言いましたが、今は、鬱蒼と茂る森の中、地べたにペラペラの生地で作ったテントを張って、その中で土の匂いを嗅ぎながら寝ることを贅沢だと言います。

何が進歩で、何が成功ですか？

人は罪の中に死んでいるどうしようもない者だという聖書的な教理を信じるならば、成功とか、進歩とか、文化的とか言っているのは、欺瞞でしかありません。

戦う欲望に駆られながら生きている人類が、そのままの状態にずっといるならば、戦争が、武力の戦争のみならずいろんな形に変えた偽善極まりない戦争が無くなることなんかありません。

聖書が私たちに語り掛けて来ることは、どんな小さな戦いを見ても、対岸の火事ではなく、そこに自分の姿を見ることです。

Part Four

私たちは今、色々な国、色々な言語、部族・民族、文化、習慣に分かれて、世の中で一定の権威を持つ特定の国家に属しています。

そして、「天下統一、みんな一つであればいいのになあ」と人類が思ってきたこと数知れずですが、なぜ、こんなに国家が分かれているかご存知ですか？

これすべて、神様が成して下さった一般恩恵としての恵みです。

人間の戦う欲望ゆえの分断・分派であります。神様は、その罪なる結果さえも用いて、期限付きの恩恵として下さいました。

ローマ人への手紙 13 : 1 - 2 (パウロ)

この御言葉は、天皇崇拝を拒んではいけないとか、神社参拝の強制を拒んではいけないとかいう話ではありません。

しっかりと、拒んでください。

パウロがここで言おうとしていることは、神様が国を分け、大統領を立て、首相を立て、皇帝を立てたのは、彼らに権威を持たせるためではなく、戦う欲望の塊である人間たちを統制するためであり、互いに緊張感を持たせて、その適度な

緊張感ゆえに少しでも長くこの地上に平和な状態を保たせるために権威を分散したということです。

人間の戦う欲望ゆえの悲しい結果を、神様は、期限付きの恩恵に変えて下さったということです。

もし、アダムから引き継いだ戦う欲望の塊である人間が、他者や他国の視線やルールに対する緊張感が無かったら、世界は地獄のようになって、とうの昔に滅びたはずです。

では、なぜそこまでして、神様は、このいずれ滅びゆく事が決まっている世界を保っておられるのか？

ペテロの手紙第二 3：9（パウロ）

すべての人が悔い改めて、聖霊を与えられ、主イエス・キリストを信じて生まれ変わり、沈没しかかっているこの滅びる世界とともに滅びることが無いようにという神の愛ゆえに、今のこの世界は保たれています。

私たちの欲望の成就のために存在しているのがこの世界ではなく、神様のすべての人に対する愛の成就のため、一人でも多くの人々が神の愛に、キリストの愛に気づき悟り、救いに与るために保たれているのがこの世界です。

私たち罪人の短絡的な視点と、愛なる神様の時空を超えた永遠の視点とは全く違います。

こういう話をしますと、「何で世界が滅びるなんていう、そんな悲観的なことばかり言うんだ」と必ずや反発がありますが、悲観的なことを聖書やパウロやペテロやイエス様が言っているのではなく、現実を言っているのです。

キリスト教信仰は全くもって悲観的ではありません。
至って希望に満ちていますし、どんな時でも喜べます。
そして、神に生かされた者として、人を本当の意味で生かすことができます。
クリスチャンたちの顔を見れば、一目瞭然ですね。

さっきの話ではないですが、「めぐみ教会の牧師洪豊和はイケてない。しかし、よく見ると、将来栄光の日にその体が栄光の内に新しく変えられ、弱いこともなく、もうこれ以上病や老いや腰痛や肩痛に苦しむこともなく、復活されたイエス・キリストと同じように栄光の姿となって、神の子として堂々と新しい天と新しい地の上を歩くようになり、やがてこの地の悪と罪と卑劣が天から降ってくる火によって焼き尽くされることを知っているがために、イケている人になった」ということです。

皆さんもそうですよね？

キリスト教信仰ほど、現実には即したものはありません。

現実を見据えること、現実と直面すること、現実と正直に向き合い、この世界には何の希望のないことを認めること、そこを認めるところに希望があり、救いの意味が浮き彫りになることを知っているのがクリスチャンであり、キリスト教信仰です。

Part Five

人は、イエス・キリストを信じて、生まれ変わらなければなりません。

イエス・キリストを信じて生まれ変わる以外に、私たちに許された曇りひとつない永遠の希望となる救いはございません。

なぜならば、この世界は神の怒りを受けて至って妥当な私たち人の罪に満ち溢れている世界だからです。

だからこそ、エペソ書2：4の「しかし、あわれみ豊かな神は」という福音が、福音となるのです。

これまで語ってきた悪や罪などとは、全く違う次元でことを成して下さった豊かな神のあわれみと愛が福音です。

福音は、確実に迫っている裁きを免れることが出来る、神様が、ひとり子であられ私たちの救い主であるイエス・キリストの内にあってなされたことゆえに、罪悪に満ち、罪に定められている世に対して余念のない私たちが救われ、神の国へと移されることが出来るということであり、それぞれ福音のメッセージです。

私たちは世の国々に属さない国の国民になり、その国に入ることが出来ます。キリストの国、闇のない光の国、天の御国の市民です。

この国は世に属する国ではなく、揺れ動くことも一切ない国です。

神を信じ、キリストを信じた者たちが入る国です。

これこそ、人が聞くことの出来る言葉のうち、最も感激的なニュースですね。

Conclusion

福音に生きる、イエス・キリストによって新しく生まれたキリスト者にとって、この世の混沌は、もうこれ以上恐れるにも値しない、期待するにも値しない、良い意味で冷静に冷めた目で直視出来るちりあくたです。

必要以上に喜ぶ必要もなく、必要以上に悲しむ必要もありません。

世の中の精神、思考方式、政治家、快樂、喜びに希望を置くことがなくなりません。

その代わりに福音を信じます。

もちろん、クリスチャンだからと言って、交通事故に合わないとか、病気にならないとか、戦争を経験しないとか、爆弾を避けることが出来るとか、成功するとかでは決してありませんが、だからと言って、本質的に何の影響も受けません。

至るところ、「で、なに?」、「それで、なにか?」と、不必要に魂の底から震えることもなければ、不必要にこの世に期待することもしません。

その代わりに、愛することを知っています。

条件のない愛を実践したいと奮い立たせられます。

もし、自由に爆弾を作れる富や権力が手に入ったとしても、爆弾を作る代わりに花火を作って、人を楽しませ、人を喜ばせ、人を笑顔にし、そして、キリストの愛へと導くことをしたい、する者となったということがクリスチャンだということなのです。

本当の意味で人を生かすことができるのが、キリストを信じるクリスチャンたちです。

殺人事件、強盗、暴力、窃盗、性犯罪、うそ、嫌悪、すべての肉体的罪などの悪い知らせを聞いても恐れず、驚かず、主に信頼して心揺るがないようにされるのがクリスチャンです。

それでもまだ恐れ、驚きますか?

恐れず、驚かないでください。

起こって当然のことが起こっているだけのことです。

今の世界が、ノアの洪水の時代やソドムとゴモラの時代と何ら変わることはない滅びゆく世界であることを真っすぐに見、真っすぐに語れる恵みを感謝したいと思います。

そして何よりも、「しかしの愛」に入れられていることを感謝したいと思います。

イエス様信じましょ!

イエス・キリストを信じましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 2：4－5 a